



ま
ち
の

達人

TATSUJIN

大正琴愛好家
橋本 孝明

楽器を弾きたいと思ったのは、45年ほど前の大学1年のころ、大学祭で聴いた学生クインテットが奏でる「鈴懸けの径」の軽快なメロディがきっかけでした。兄のクラシックギターを借りて、我流で練習をし始めたのですが、すぐに棒を折ってしまいました。30歳のころ、ジャズギター教室に4年間通いました。が、やっぱり途中で投げ出してしまいました。リズム感がないからとか、生来の飽き性だからとか自己弁護の理屈をつけていたのですが、よくよく考えてみると練習不足こそが原因と後悔しています。

その後は、ごくたまに昔の楽譜を使って、メロディやコードをギターで弾いて適当に楽しむだけでした。ところが、50歳半ばに、姉がやってきた大正琴を見て、これは簡単にやれるのではないかと楽観的に考えて飛びつきました。ピックやアンプを使うことがギターと同じで、数字譜の譜面が五線譜より楽そうに見えたからです。

入り口は楽であつたのですが、想像していたほど簡単ではありませんでした。低音部から高音部まで、4パートのアンサンブル演奏は音楽性が高く、なかなかのもの。古賀メロディをボロンボロンというイメージの大正琴でしたが、どっこい実に広いジャンルの演奏が行われています。童謡、唱歌、演歌、ポピュラーはもちろん、「白鳥の湖」などのクラシックから、「鈴懸けの径」のジャズまで、演奏者の力量、し好に応じて実に多様です。ほかの楽器との共演もでき、奥の深いものです。

大正琴を始めてすでに8年余り、父親との共演を誇る娘をなだめたりすかしたりして、四苦八苦しながら弾いています。



水族館

学芸員 小林龍二

竹島水族館 ☎68・2059

待ちに待った川での採集シーズンが到来しました。今年も後輩たちを連れて市内の川に繰り出します。見かけたら気軽に声をかけてください。

さて、川で魚を採っているのは私たち水族館人だけではなく、意外にも多くの方たちが川で楽しんでます。とりわけ蒲郡で多いのが「川オヤジ」と呼ばれる近所の男性で、自宅の庭に衣装ケースなどを並べて、採ってきた生き物を飼って楽しんでいるおじさんです。中には私たちよりも多くの情報を持っており、毎日のように川に入っている方もいます。採集に出かけると、腰まで水につかってビタビタになっている川オヤジに突然

川オヤジ、川ガキ

遭遇することがあります。そんなときは採集を中断して、川の中で長話をします。

川オヤジは魚を採って持ち帰り、自宅でかわいがることを最高の楽しみとしており、これは近所の子どもたちにとつては貴重な存在です。川オヤジは、子どもたちに生き物の魅力を伝える、水族館と同様の、かなり重要な役割を担っているのです。

そして、川オヤジとは逆に川で遊ぶ子どもたち「川ガキ」もいます。しかし数は少なく、生き物風に言うなら「絶滅危惧種」です。子どもたちにとつては、川は危ないだろうし、ほかに楽しい遊びがたくさんあるので、少し残念です。それでも、西田川公園の近くは簡単に川に下りることができて浅いので、川ガキがおり、うれしくなります。

「川オヤジ」と「川ガキ」の交流で生き物の魅力伝達ができれば理想的です。

水族館としては、これを維持し、助ける役目が果たせたいと思います。